

藝術的なるものと道德的なるもののこの

關係に於て、悲劇的なるものの分析

小笠原 秀 實

一

悲劇、若しくは悲劇的なるものは、あらゆる藝術的活動の中、就中最も複雑なものゝ考へられる。そしてこの複雑性が、藝術的なるものゝ道德的なるものゝ複合に依つて成立するやうに思はれる。こゝで道德的、並びに藝術的の意味を明らかにして置くことが、この問題に對して最も方法的であるゝ考へられる。

二

この場合私は最も廣い意味に於て、そして又特有の意味に於て、道德的なる言葉の性質を限定したいと思ふ。道德は普通人ゝ人ゝの關係から生れ來るものであるゝとされてゐる。私はそのこゝを最も單純に承認する。

然し人ゝ人ゝの關係の外に、殆んど常に人ゝ神ゝの關係が考へられ、そしてそれは宗教と稱するゝものゝ本質を構成してゐるゝ云ふこゝになつてゐる。このこゝ自身を今私は明確に分析したいゝ云ふ意圖を持たない。何故ならばこゝで提案として宗教を取り上げてゐないのであるから。然し今私は道德的なるものに考察の中心を置かねばならぬ方法的立場にある。従つて人ゝ神ゝの關係も、少くも部分的には道德的關係として了解される一面を持つ。何故ならば、私はこの場合、道德を最も廣い意味に考へて、自己若しくは自我の非我に對する關係であるゝ定義附けたいからである。そして又自己が自己に合一して行く活動一般を藝術と稱びたいからである。約言するならば自己が自己の本質に冥合して

行く活動そのものが藝術であり、自己が自己ならざるものに關係し、就中特に實踐的の傾向を濃密に含んでゐる活動が道德である云ふことになるのである。従つて更に約言するならば、自己が自己以外のものに對するあらゆる實踐關係をこゝでは道德的と呼ぶのである。

三

人々人々の關係は對當者の關係であり、並列水平の關係である。然し人々神々の關係は、上下の關係であり、絶對相對の關係であり、理識別を超越すべきであるとも考へられる。これは有力な反論である。然し今は人々神々の關係を全般的に決定しようとするのではない。たゞ神が自己に取つて他者である云ふ點に於て道德的關係を定立しようとするに過ぎない。その他の細論は別に譲るべきである。云はゞ人々人々の關係に於ては、相互の間に公正さか、正義さか、相互愛さか云ふ徳目が成立するのに、人々神々の間には、絶對依憑の信賴、絶對依托の從順さ云ふやうな徳目が成立する。更に神々人々の間には視子の間柄に類比せらるべき道德的情愛が築かれるのであり、神を父と呼び、縁を親縁に譬へる。かゝるここの成立し得る限り、この場合、便利の爲め、神人の關係をさへも、道德的なものの中に包含する。そして道德は自己の他者一般に對する實踐關係である云ふことに變りはない。

四

人は神に對置されると同じやうに、自然にも對置される。自己に對して他の人が非我であるやうに自然も亦非我である。然しこの場合、自然に對して道德的關係が成立し得るかは一つの問題である。自然に對しては眞妄の別は生れ來るであらうけれども、正邪善惡の判斷は成立し得ない筈である。もごより自然そのものに對して實踐的に善惡邪正があらう筈はない。然しこの場合、ある便宜の爲めに、自然に對する我々の態度には是非善惡があるを考へられる。解き得べからざる自然の問題を解き得るにしたり、又解き得べきを解き得べからずとするならば、それは誤謬に過ぎないのであ

るが、之れが實踐に關係する限り邪曲である。プラトーンは知識と勇氣と節制との三徳の根據に正義を認め、理性が正義に従つて働いた時、それが知識であり真理であるとする。この意味に於て對自然への認識も亦正義なる徳目に従ふことになる。更に個々の自然現象のみならず全自然の必然的法則そのものに對するならば、それは殆んど神と同様なる人格的森嚴さを持ち、敬虔と忍従との對象そのものに揚棄されるであらう。今も尙甚だ多く人間を支配し、就中悲劇精神を支配してゐる運命なるものは、往々自然必然の迫力ある意識的存在のやうにさへ考へられてゐるのである。かうした關係に於て、自然も亦非我であり、自己との間にある道德的關係を定置するでもあらう。かくてこゝでも亦道德は、自己の他者に對する實踐的關係として認承せられるであらう。

五

さて藝術は、道德が他者への實踐的關係であるに反し、自己が自己に合一して行くことであるを考へた。それは抑も何を意味するか。

藝術は意識そのもの、本性に隨從した動きである。即ち意識としての本源的なものを實現することであつて、常に快適の感を以つて應じてゐる。不快、不適應な感じは藝術の本質に背く。ある一つの心の状態、それを我々がいつまでも維持しようとするならば、それは我々の願つてゐる状態であり、心の郷土であり、意識の本性である。藝術が如何なる表現を取つてゐようとも、かうした快適の感を具備するならば藝術であり、然らざれば藝術を離れる。

六

藝術は屢、利用の意味を離れてゐる活動と解釋されてゐる。それは正しい。そしてそれは又往々「藝術の爲めの藝術」を定立される。それも承認されるべきである。然しこの場合、利用とは何か、又「藝術の爲めの藝術」の眞髓は何か、更に精密に分析されねばならぬ。

藝術は利用を離れるに云ふことの利用の意味は、藝術は自分の目的があるので、そのものに忠實であるべきであり、他の目的の爲めに利用されるべきものではないに云ふ意味の利用である。即ち他のものへの手段であつたり、方法であつたり、過程であつたりすることは眞の藝術でないに云ふのである。

然しこの定立に對して「生命の爲めの藝術」が、更に一層力強い呼吸に於て成立を主張する「藝術の爲めの藝術」は多く技巧に感觸の末に囚はれ、眞の生命を失ふ。生命は一切の基礎である。生命の内容を充足せず、又その伸展を助けず、やゝもすれば生命の眞髓を荒類弛緩せしめて、人間を枯死させる。さうしたものは眞の藝術ではない。生命の爲めにのみ役立ち得る藝術が初めて眞の藝術である。これが「生命の爲めの藝術」である。

この對立は如何に解決されるべきであるか。

七

これは可なく長く、且つ入込んだ問題になつてゐるのであるが、生命並びに藝術の實質を明らかにすることに依つて比較的なたやすく解決される。

藝術は自己が本來の性質に隨順して動く働きであるに云ふやうに前に考へた。さう云ふ高踏的な藝術も、人間の本性に背馳する活動ではあり得ない。又如何なる耽美的、唯美的な作物も、之れが藝術である爲めには、又それが美である爲めには人間の本性に隨順することを實質とする。さうである限り「藝術の爲めの藝術」に云ふことは「人間本性の爲めの藝術」に云ふことに歸着する。更に人間の本性は生命自體に同意語たるべきである。かくて「人間本性の爲めの藝術」は「生命の爲めの藝術」に置きかへられる。そしてそれは實に「藝術の爲めの藝術」の別の表現に過ぎないのである。

若し「藝術の爲めの藝術」が人間の本性そのものを表示せず、人性の本質でないもの、又人性の分裂せる一要求を満

すに過ぎないものであるならば、この提言は正しき藝術を規定しないものとして排除することが出来る。例へば技巧的些事にのみ心を用ひ、大きく深く人性を表示しないものは、眞の藝術でなく、又一部官能的快感を分裂的に刺戟し、人性の全體を病ましむる藝術も、同じやうに眞の藝術ではない。かうした藝術を理想とする限り「藝術の爲めの藝術」は誤謬である。

然しこれと共に「生命の爲めの藝術」も亦その意味を明確に限定しなければならぬ。生命は人間の實質であり、それ自身の爲めの生命であり、云はゞ自己目的の活動であり、如何なる他のものへの手段でもない筈である。かうしたものの爲めの藝術は、やがて藝術の爲めの藝術と一致する。即ち生命自身、人性そのものへの合一だからである。

こゝに注意すべきことは、生命が時にやゝ廣義に使用されることである。云はゞ直接生命そのものゝ内性へ深まつて行く活動と、もう一つ間接的な、そして手段的な活動とである。手段は結局、目的への手段であるが、目的そのものとは性質を別にする。若し生命が手段的の意味に解せられるならば「生命の爲めの藝術」は手段の爲めの藝術と云ふことになる、藝術は實に手段の手段となる。かうしたものが眞の藝術でないことは明らかである。

かゝる關係に於て「藝術の爲めの藝術」と「生命の爲めの藝術」とはそれらが純粹である時、全く一つのもので表示するのである。

かやうにして藝術は生命そのものへの合一であり、これに反して、道德は生命の實質ならざる他者への實踐的關係である。云ふ最初の考が説明され得たものであると思ふ。このことを根據として悲劇的なものゝ分析に進みたい。

八

心、若しくは生命が、たえず自らの本性に於てのみ動き得らるゝならば、それは喜ばしいことである。然し心は、そして生命は、本性にあらざるものに拘束せられ、抑制され、強制されねばならぬ必然的な過程に置かれる。これは願ふ

願はざるに拘はらず、必然的にかうした過程が存在する。これが心そのものゝ何う云ふ關係にあるか、何が故にこれが生れなければならぬかに關しては、様々な形而上學的な考がある。然しこの場合かゝる考を是非するこゝを止め、たゞ意識的事實として、意のまゝならぬ過程があり、心そのものゝ本性に従へない必然があるこゝを認むるこゝが出来らばそれで充分である。こゝに他者への關心、即ち道德的なものゝ成立する根據がある。

他者への關心は、そのこゝ自身としては、決して心の幸福ではなく、又願はしき状態ではない。それは進まざるを得ない必然である。實に無くてならぬ條件としての道である。然しこの道を進むこゝに依つて、心は他者のありのまゝを知り、他者から来る制約の苦痛を知り、又それを脱却するさまざまの方途を模索し努力する。この働きに於て心は複雑となり、多面的となり強健となり、剛毅となり、又賢明となり、忍従となり、その他對他的に自己を擁護し確立する訓練を把握する。ありのまゝの認識を求むるこゝ、如法の實踐を遂行するこゝ、すべてこれらは對他的に自己を確立する手段である。これは知識的でもあり、意志的でもあり、同時に感情的でもある。云はゞ知情意の三つの機能が一つになつて對他的に動いてゐる姿である。決して切り離された、知識、意志、感情が別々に動いてゐるのではない。そしてこのこゝに依つて對他的ではあるが、意識の内容、心の内容を甚だ複雑にする、それは關心の姿に於て心を緊張させ、弛緩させ、又抗爭に勵まし、忍従に慰める。これが他者への關心的生活の心の實相であり、又實に道德的活動の事實である。

さてこの事實に對して如何なる態度を取るのが藝術の任務であるか。又悲劇の出生に何う云ふ意味があるのであらうか。

九

シルレルが「悲劇的對象に於ける快感の根據に就て」の論文の中に、道德が勞苦の中に與へるものを、藝術は遊戲の

間に與へるに云つてゐるのは、この問題に對する一つの指針である。道德が與へるものは何か、又遊戯の間とは何かそして又勞苦中に與へられるものが、何うして遊戯の間に與へられるのであるか、更に又勞苦の間に與へられるものも遊戯の間に與へられるものも、全く同じものであらうか、これらの問題が解決されなければならぬ。

シルレルの藝術觀は甚だ多くカント的であり、その原理も亦合目的性を採用してゐる。従つてこの考は又甚だ形而上學的である。我々は必要な限り、又は考察のある限界概念として、形而上學的思辨の助力を求むべきであるが、この場合、成るべく平明に、そして又意識的事實として藝術的なものを分析したいのであるから、勞めてシルレル的形而上學を離れたいと思ふ。従つて道德が勞苦の間に與へるものを、藝術は遊戯の間に與へるに云ふ考に對しても、特にシルレル的解釋に依る必要はないのである。たゞ單に道德と呼ばれてゐるものは、意志的な努力精進に依つて人間的價值を獲得するのであるが、藝術と名けられてゐる一團の文化財は、遊戯鑑賞裡に人間的價值を獲得さすに云ふ意味に解釋すれば充分である。

そこで道德とは嚴密に云つて何か、又藝術とは嚴密に云つて何か。この問に答へるものが上來説明し來れるものであり、即ち道德とは、精神が他者への關係であり、藝術とは精神が自らの内面に深まる活動である。道德と藝術とが、心の外と内とへ動く働きである限り、二つのものが全く同じであるとは云はれないし、又同じものを與へることも斷定することは出来ない。かくてシルレルの考であり、又多くさう考へられ易い傾向にある二者の一致は（たゞひ、勞苦の間と、遊戯の間との差別はあるにしても）根本的に一つの修正を要する。そしてこの企に依つて、藝術的なもの、就中悲劇的なものゝ人間に對する眞の意味をより明瞭に規定することが出来るであらう。

一〇

藝術は精神の本源活動なるが故に常に快適の感を伴ひ、道德は本源的活動でないが故に、努力の感を伴ひ、快適の感

を持たない「善を爲す、最も樂し」と云ふことは事實であるが、この樂しさは手段を完成した樂しさであつて、精進そのものの樂しさではない。若し精神そのものが樂しみであるならば、それは最早や勤行精神の域を脱却して、自受法樂の領域であり、精神そのものの本源活動であり、云はゞ藝術的活動である「祝福は徳の報酬ではなく、徳そのものである」(スピノーザ)と云ふ考は、徳即福であることを提示するが、かゝる徳は勤行精進の徳ではなく、自受法樂であり、法性への冥合であり、努める意圖なくして自然に五慾を遠離する姿である。畢竟徳の極致に到つて努力を遊離し終り、本源の活動に歸還し盡した境地であつて、寧ろこゝで藝術と呼んでゐるものの性質である。そしてこの境地に到るのは決して容易ではなく、スピノーザの言葉に依るならば「すべて最勝のものは、希有なるが如く、至難である」道徳的過程としては、實に希有最勝であり、又難中之難である。かくて道徳そのものは常に努力の感を伴ひ、この感なくば最早や道徳の闕域には存在しないのである。

道徳はかゝる努力に依つて、正見を與へ、正行を生み、正業を實現する。即ち自然並びに人間に對して、最も妥當なる生活を生み出し、これに依つて、個人のあらねばならぬものを提示する。かくてこゝに徳目の一切が成立する。すべて徳目は、正しく知るこゝゝ、爲さねばならぬこゝを強く勵むこゝゝ、爲し得ざるこゝに對して忍ぶこゝゝの三つに要約される。即ち正しき認識と勇氣と忍耐との三徳に歸着する。そしてこれらに一貫するものは常に努力である。努力は常にある苦痛を持つ。この努力と苦痛とに依つて、精神の對他の性質は複雑化し、緊張化し、力の上に更に力を築き、對他のに人格を廣くし、且つ強大にする。それは正しき認識に依つて、又力ある勇氣に依つて、更に又強靱なる忍耐に依つて。

一一

かゝる道徳的なものを想像化することは出来る。然しそれだけで道徳が藝術化されたものは云はれない。何故な

ればそれは現實的實感的道德行動がそのまゝ想像に移されたのみであつて、少しも藝術化的要素を含まないからである。それは現實的道德に對して想像的道德に過ぎないからである。

想像化に二種ある。關心的現實を關心のまゝ想像化するものが一つ。もう一つは關心的現實を想像化するに當つて、無關心的な方向に轉化させる想像化である。藝術としての想像は無關心的な方向にあることを本質とする。云はゞ想像は藝術と道德との兩面に通用されるのであるが、特にそれが藝術的である爲めには、無關心性に於ける想像でなければならぬ。それは想像と云ふことが藝術の本質をなすのではなく、無關心性が本質をなすからである。かくて道德は無關心的な想像化を経ることに於て藝術の領域に入るのである。

かやうにして藝術が如何に寫實的であらうとも、又如何に自然主義的實在を固執しようとも、それが藝術であることとふ理由に依つて現實そのものから離れること共に、又道德そのものからも離れる。従つて「道德が勞苦の間に與へる者を藝術は遊戲の間にあたへる」と云ふ考に於ける「勞苦の間」と「遊戲の間」の區別が明白になる。遊戲の間とは畢竟無關心的活動の間と云ふことに歸着するからである。

さて、二つのものゝ與へるものは全く同じであるか、これが次の問題である。

二

道德は勤行精進の努力を通して現實に於ける實踐的人格の向上を助ける。こゝに獲得されるものは現實に於ける人格の生長である。然し藝術は單に想像であり、就中無關心の想像なるが故に現實をはなれる。現實そのものゝ向上としては、たゞひそれが可能であるにしても、間接である。場合に依つて非効果的である。對他の認識と實踐とは、こゝでシラレルとの想像してゐるほど、それほど容易ではない。若し止むを得ない場合、しかも適當な制裁がある場合には、外面的な制裁さへも認められねばならぬ程、それは勞苦的である。もこより勞苦の爲めの勞苦、制裁の爲めの制裁は無意

味であり、更に妥當的ならざる制裁も謹むべきであり、そして又妥當か何うかを決定するのにも甚だ周到なる認識の吟味、即ち正見を要する。かくて知を盡し意を盡した適當な制裁か認められるならば、自らの規制にしても自策自勵すべきであり、又正見に立脚するならば他からも鞭打つべきであり、打たれたるものは、このここの適應性を正見して、一路向上の方途を進むべきである。すべてこれは勞苦の過程であり、又かゝる過程を認めねばならぬ程、對他的正見と正行とは困難な事情に置かれてゐる。これ程困難な過程のすべてが、シルレルの考てゐるやうに、常に遊戲裡に與へられる云ふことは、あまりに樂觀的誤謬を含む。即ち道德が勞苦の間に與へるすべてのものを藝術は遊戲裡に與へる云ふことはあり得ない。たゞひ與へられるにしても、それは一部であり、又變形せるあるものこしである。

一三

然らば藝術は道德の一部であり、又その補助活動に過ぎないのであるか。さうではない。

藝術は精神の本源的活動を實現するこゝを實質とする。それは全く道德と別の領域であり、更に道德は對他活動として手段的なるが故に、精神の本源的活動に従屬する。これは根本の定立である。

然し藝術はその内容として道德的なるものを取上げるのみならず、藝術の使命を正しく果す爲めには、何うしても道德を取上げねばならぬ必要がある。之はすべて對他的のものは、精神そのものに向つては、無くてならぬ條件であるから。かうした場合、道德は無關心的想像の形に於て取上げられ、無關心的な情操の豐滿なる狀態に於て再現され、又創造され、すべて無關心的感激の間にその全貌を把握し鑑賞する。従つて道德に於ては直接の行動であり、奮闘であり忍従であり、苦痛であつたものが、こゝでは鑑賞の靜けさに於けるそれらである。

オスカー、ワイルドの次の語がこゝで引用され、且つ批評されるべきである「エビキュリアンとしてのマリヤス」の中に於てペーターは、宗教の生活と藝術家の生活を調停しようとしてゐる。然しマリヤスは一人の傍觀者に過ぎぬ。

實に理想的な傍觀者である。ワーズワースが詩人の眞の目的であるを定義した特有の感情を以つて、人生の光景を冥想するこゝが許される理想的傍觀者である。然したゞ單に一人の傍觀者に過ぎない。そして恐らく、彼の眺めてゐるものが悲しみの殿堂であるこゝを氣付くには、殿堂の倚子の美はしさを以つて、やゝあまり多く占有されてゐる。これがワイルドの云はうにしてゐるものである。

こゝで知りたいこゝは、(一)マリヤスが人生の傍觀者であるこゝ、(二)詩人の本質をなす特有な感情を以つて人生の光景を傍觀してゐるこゝ、(三)それはたゞ傍觀者に過ぎず、就中人生が悲しみそのものであるこゝを知るのには、あまりに高踏的な鑑賞的地位に立つてゐるこゝ、(四)そしてかゝる傍觀者であるこゝは人生そのものの、悲痛を生きるこゝには及ばないこゝ、大體この四つである。

さて必要なこゝは、(二)の詩人の本質をなす特有な感情を以つて人生の光景を傍觀するこゝ云ふこゝである。これは簡單に云へば、無關心的に現實を眺め鑑賞する藝術の立場を指摘してゐる。人生に對し自然に對し藝術は寧ろ傍觀的である。無關心と云ふこゝは、關心界に關して傍觀的たるこゝに甚だ近いからである。従つて(三)(四)に於ける傍觀的態度の批難は、こゝに考へて來た藝術的態度の批難である。かくてワイルドの云ふが如くんば傍觀的態度、即ち藝術的態度は、人間として不充分的態度であるこゝ云ふこゝになるであらうか。

一四

對他の奮闘と苦痛への忍従とのみを人間の目的とするならば、傍觀的態度、無關心的態度、そして又藝術的態度は、重要視すべきものではない。然し幸か不幸か、人間は己が本性に隨順し、快適の心情に於て生きねばならぬやうに成立してゐる。他に進まねばならぬと同じやうに、自らにも還らなければならぬ。流轉の必然を追求しなければならぬと同じやうに、還滅の郷土にも歸り、寂靜の心境をも實現しなければならぬ。人生に對する無關心的態度は、人生を實現

し、度生の眞を達成する上に於ては、甚だ疎んずべきであるが、又よく性を達し、人格の内光を汲んで、自全の歡びを實現する上に於ては、忘れ能はざる本然の郷土である。たゞ郷土に歸るべからざる日、強て自らの安逸を求むることは避くべきであり、正見と正行とに背いて逸樂の頽廢に溺るゝことは誠に恥づべきである。然しかゝるこゝ多き生活の間にありながら、許されたる精神の暇に於て、本來の郷土を望見し、永遠の舊里を憶念するこゝは、又生き行くこゝの根幹である。それは法悅の姿に於ても、法樂の相に於ても、歡喜踴躍に於ても、瞑想の恍惚に於ても、そして又觀照の絢爛に於ても、すべて他に求めざる心境、自足の圓成を體得するこゝを骨髓とする。たゞひこれは關心的人生の傍觀であるにしても、精神そのものゝ自ら養はるべき清醇の源泉である。

一五

悲劇的なものは甚だ多く道德的内容を含む。人生の苦痛、それに對する道德的なさまぐの努力。それらの努力は運命の下敷となり、自然理法からの翻弄となり、又屢人間錯誤の犠牲となる。すべてこれらは悉く苦痛である。この苦痛が悲劇に於ては、想像の無關心性に於て藝術化される。然し如何な藝術化されやうとも苦痛はやはり苦痛である。リップスが悲劇には苦痛が附屬するこゝ云ふのはそれであり、又シルレルが德ある者の苦惱は德に背く者の苦惱よりも苦しい感情を與へるこゝ云ふのも之れであり、更に又ソロヴィヨフが、悲劇に於ては自己の現實と、あらねばならぬものとの間にある内面的矛盾の自覺が一貫してゐるこゝ考へてゐるのもそれである。たゞ問題は悲劇の中に於ける悲しみの性質は何であり、又その意義が何であるかにある。

悲劇の中に於ける悲しみは、上來の説明に依つて、無關心的であり、傍觀的である。然しこの悲しみが無關心の境中に於て何を實現するかゝこの場合重要である。

無關心であるこゝは、關心的な場合よりも、苦痛の深刻に堪へしめる。苦痛の深刻に堪へるこゝに二つの意義がある

(一)深刻なる苦痛は道德的に最も複雑なる、そして最も意義ある葛藤より生れる。かゝる葛藤の事實を客觀的に認識することは、知識としては深化するのであり、感情としては眞摯な緊張を強める。これが第一の意義である。更に又(二)現實に於て知り且つ堪へ得られざる深刻なる苦痛を、無關心的立場に於て堪え得ることは、たゞ單に精神としての緊張であるのみならず、精神そのものを強くし、やがて現實の苦痛にさへも堪え得る力をはぐむ。こゝに悲劇を歌へる希臘の詩の一節が引用される。

我よりもいたましく

邪曲に堪へる人を見る時

人は常にたやすく

自らの不運に堪へる。

第一の意義は實在への認識を深めさせ、そのこゝに依つて、かゝる認識に結合してゐる感情を純化させる。このこゝよりして、すべて實在への認識が不正確であつたり、粗雑であつたり、故意に若しくは無知の故に、大なる誤謬を含んでゐる場合、それは眞のよき悲劇たるこゝは出来ない。すべて藝術に於ける俗物的、俗衆的、凡俗的、低級的作物と呼ばれるものは、多く實在への認識が充實せず、少くも時代の最高最良なる知識と齟齬する點を含んでゐる。藝術に於ける大衆的と云ふ言葉には、良い意味と良くない意味との二つを區別することが出来、良い意味では、一般人間的、普遍人格的、人間相互結合的、卒直平明的更に又孤獨高踏的でないこゝ、洞窟的耽樂でないこゝを指示してゐるやうであるが、良くない意味としては、やはり凡俗的、俗惡的の要素を持つて考へられる。そしてこの要素の根本にあるものは正しき認識に基礎付けられてゐないこと云ふことのやうである。従つて悲劇的なものも、之れが俗物的であらぬ爲めには、少くも根底に正しき認識、時代の最良なる良心の上に立てる認識、約言するならば正見に基礎付けられてゐない

ればならぬ。悲劇の動機をなすものが、運命と呼ばれるものであるにしても、性格と呼ばれるものであるにしても、自然必然の科學的理法を名けられるものであるにしても、人間的必然を考へられるものであるにしても、何れも極めて正確にして周密なる認識に基礎付けられねばならぬ。藝術なるが故に實在の認識を粗雑にしていゝ譯はない。たゞそれが學そのものでないことよりして、探究の中心がそのことに置かれ、學術の過程をたぎつてゐるのではないだけのことであつて、藝術性の基礎としては何處までも正確であることを必要とする。さうでなければ感情の純化を産まず、同情と感激との強さを確立し得ない。

一六

第二の意義、即ち我よりもいたましく邪曲に堪へる人を見て、たやすく我が不運に堪へて行くことは容易に理解される。假象に於てあり得べき最も深刻なる苦痛を比較的純粹な感激の間に認識し、自らの性情を深め、人間としての力の最大を想像の間に實現し、低劣なる人間の弱點を涙に依つて純化し、弱き人間の現實としては、最も高き可能な生命を構成する。かゝる最高の感激に於て藝術としての使命は完成する。即ち人性の本源に歸つて達成し得べき生命造營の高頂を實現するからである。藝術としての悲劇はこの純情の美はしさに於て極致する。然しその道德的効果としては、苦痛に堪える力を得るのみならず、又奮闘の意志をも鼓舞される。かゝる忍耐と奮闘の鼓舞は、直接効果よりするならば、前に云つたやうに道德的刺戟に及ばないかも知れない。場合に依つては道德的教訓が遙かに卓越する。又實に卓越すべきである。何故ならばかゝる目的に適合するやうに特に創定せられたものが道德的教訓だからである。この點に於て單純に藝術の優越性を考へるのは、あまりに感傷的であり、又あまりに浪漫的である。若し現在の道德的教訓がこの點に於て効果的でないならば、それは現存せるものゝ一時的不完全に歸すべきであつて道德そのもの、不完全性ではない。

然し藝術はかゝる實踐的效果を主眼にしてゐない。それは藝術的感激の極致を實現したここに於てその使命を果すたゞこの感激を呼び起し、又これに依つて成立したものが、對他的に利用されて道德的意義を持つ云ふまでである。云はゞそれは一つの副作用に過ぎない。然しこの副作用はすべての點に於て道德的教訓に及ばない云ふのではない。感激的情熱の豊滿なる點に於て、又無味な道德的荒涼を美はしさの精彩にあやなして倦怠を慰め、理想を絢爛の姿に彩つて、かつ努め、かつ楽しむ餘裕を扶植する。それは峻厳でもなく、強行でもなく、突撃でもない。然しそれはたえず疲勞を癒しつゝ、たえず進展しようとする。この點に於て道德の與へる實踐的效果は、藝術の間接に誘導する實踐的效果はやゝ性質を異にする。道德が勞苦の間に與へるものを、藝術は遊戲の間に與へる云ふシルレルの意味は、かやうに訂正せらるべきであり、道德の與へるものと藝術の與へるものとの間には、互ひに與奪があつて、同じものではない。約言するならば藝術の與へるものは、常に人性の本源に關するものであり、道德の與へるものは常に手段に關するものであり、こゝに藝術と道德との間に、目的と手段との關係が定立されるのである。

一七

かやうにして悲劇的なものゝ實踐的效果を、最も始源的に、そして又要素的に指示し、取つて以つてその象徴ともなすこゝの出來るものは勞働律並びに勞働歌である。

勞働歌は、それを歌ふここに依つて疲勞を忘れさせ、勞働の能率を高める。さうした目的に利用される限りそれは純粹な藝術ではない。然しその律動的性質は精神本來の要求に叶つたものであり、それに従ふここに依つて精神は本源的な活動に歸ると共にその疲勞を癒す。癒されたる活力に依つて對他的な勞働を遂行する。これが勞働歌一般の心理的分析である。それは遊化と勞作とが同時に、又接續的に結合する。

悲劇的なものゝ道德的意味は勞働歌の勞働に對する關係に類似する。勞働歌が、勞働をはなれて、それ自身單純な

藝術的律動を持つてゐることは容易に首肯される。就中それは摯實にして剛健な格調を支持してゐることを原則とするこれを歌ふことだけで、又これを聞くことだけで、藝術的興味は完成する。悲劇も亦、たゞこれを鑑賞し、無關心的な感情の移入に始終することに於て、藝術的、人間の興味は完全である。然し勞働歌は律動の構成からして、これを勞働の促進に役立てようとするならば充分有効に役立ち得る。悲劇の内容も亦、道德的活動に向つて役立てようとする意圖されるならば、程度の如何に拘はらず、充分役立ち得る生存的な基礎を含んでゐる。たゞ然し勞働歌作製の根本動機が、常に必ず勞働促進の目的であるとするならば、この點に於て純粹に悲劇的なものゝ創作と趣を異にするかも知れない。これは別の考察に譲るべきである。

一八

意志が主要なる要素として考へられる限り、道德の本質は、要請の爲めに努力精進することゝ、要請の達成が明らかに不可能に歸した時靜かに忍従して行くことであること考へられる。詳言するならば道德としての徳目は甚だ多様であり複雑であるが、それはやゝ間接的なものゝ複合に依つて構成されてゐるのであり、若しこれらのものを離れ、純粹意志に妥當し得る本質を考へるならば、意志の本性よりして、求めるか、求め得ざるか云ふことに歸着すべきであり、求める場合は勇敢に求め、求め得ざる場合は忍従すべきである。奮闘と忍従、これにもいろいろの度合を持つてあらうが大體この二つに攝することが出来る。

意志訓練の方向としては奮闘と忍従との二つであるが、更にこれは意志の強さ云ふことの一つに歸着する。勇敢なる奮闘も意志の強さに依り、苦痛への忍従も亦意志の強さに依る。積極的に強いのが勇氣であり、消極的に強いのが忍耐である。共に意志の強さであり、道德の本質が意志にある限り、この強さが實踐のすべての場合に一貫すべきである希臘の四徳は正義と知識と勇氣と節制とであり、知識と正義は主として智力の任務に屬し、認識の正確を期すること

にあるが、勇氣を節制とは意志の強さに依屬するのであり、寧ろ道德實踐の主體であるを考へられる。プラトーンに依るならば勇氣は人體の胸にも相當する武士階級の徳であるが、この場合精神の體系に於ても、道德は目的自體ではなくして精神の胸であり、強力なる意志の働きを實質とする。道德のかゝる性質が、こゝに又悲劇的なものの分析に向つて暗示的である。

一九

悲劇的なものが道德的に教へるものも亦二つである。即ち奮闘を忍従である。

運命悲劇にしても、性格悲劇にしても、その他如何なる悲劇にしても、その認識的骨格は最も正確であらなければならぬ。これは前に考へたことである。かりに背徳者が幸運に恵まれ、有徳者が不運に終つたこと云ふ場合、それが運命と呼ばれるものゝ必然であるか、又性格を名けらるゝことの必然であるか、更に又環境的なものより來る必然であるか、何れにしても、我々はさうした結果に満足しない。主役が運命並びにその他の必然を抗争するやうに、我々も亦かゝる必然に抗争し、有徳者の幸運を實現し、背徳者の不運を要求する。云はゞ道德的正義の認識が萌すと共に、これを實現することに向つての勇氣を鼓舞される。悲劇に依つて勇氣を奮闘が教へられるのはこの経路に於てである。

然し有徳者が不運の場合、かゝる不運を惹き起す必然的なものが、若し人力を以つては如何にもすることが出來ないものであり、かゝるものへの抗争が畢竟無意味であり、慘敗に終るべきであり、殊に悲劇に於て慘敗を目のあたり見せられたとするならば、こゝに抗争の斷念、云はゞあきらめとなり、又忍従となるべきである。これが悲劇的なものゝ教へる忍従であり、あきらめである。

二〇

さてあきらめは卑屈ではないか。かうしたものが道德的意味を持つのであるか。

それは奮闘に比すれば卑屈である。然し抗争し得られざるものに向つて抗争することは、正しい認識ではなく、寧ろ盲目である。あきらむの一つの意味は「明らかに見窮む」の意味である。必然の理があるがまゝに明らかに見窮めた結果、意志の要請に合しないものであることが認識されるならば、その要請を抛棄し、断念するより外に道はない筈である。かくてあきらめの別の意味「思ひきり」「断念」の義が成立する「あきらめは心の養生」と云ふ諺が擧げられる。蓋し達成し得られないことが論理と實證とに於て明白になつた時、それを断念して、不満の懊惱から解脱することが、精神に取つて必要であることが提示してゐる。この場合、要請への抗争を断念することは卑屈ではあるが、然し必然の理法の前に尙小我と小勇を待んで生命の本性を失ふと云ふことは、勇氣に似て却つて大局を失ひ、意志の強さを待んで却つてその弱さを暴露する。断念すべきものゝ前に断念することは、即ち小我の小勇を遮断することは却つて眞の勇氣を要し、又實に強固なる意志を根底とする。忍び能はざるものを忍ぶは意志の強さであり、甚だ陰慘ではあるがストア的忍従の精神が表示される。任運無作に随順し、一切の迫害と一切の屈辱とに忍従して行くことは、明快なる理性の諦觀と、強剛なる意志の制御力とを必要とする。ストア的賢人の悲劇的忍従、そして又宗教的洵難者のあきらめの靜觀、すべてこれは強剛にして勇敢なる意志の力に於てのみ實現される。この意味に於てあきらめは決して卑屈ではない筈である。

たと注意すべきは、この場合不可抗の必然力なるものが、正しい認識に基礎付けられるか何うか、若し認識不完全の爲めに、改め得らるゝものを不可抗としてあきらめの立場に立つならばそれは認識の不備に萌す不正であり、又奮闘し得らるゝ餘地あるにあつて、云はゞ意志の及ぶべき範圍にあるべきものを、あまりに早く断念のあきらめに忍従するならば、それも正しい道徳ではない。進むべきに進み、進むべからざるに退く、確實なる實在への正見を基礎とし、意志のあらゆる努力を盡して、任運無作の諦觀に退く。かやうにしてあきらめのことは、又對他的生を達成する一つの方

途である。悲劇の道德的效果として寧ろ重要な一つである。

二

上來の所説を綜合すれば次のやうである。

一、藝術は精神の自己活動であり、道德は對他活動である。對他的に廣められ深められたさまぐの觀念は、それに特有な感情を持つ。藝術はこれらの觀念に感情を資料として取り上げ、これを無關心に觀照し得る立場を與へる。無關心であることに依つてそれは精神の自己活動を實現せしめ、これに依つて藝術そのものの自己存在の意義を明にする。そして又無關心たることに依つて、實際に於ては見るに堪へない深刻なものを見るに堪へしめ、緊張に於て精神を淨化し、又強化する。

二、悲劇の道德的效果は、道德そのものゝ甚だ類似的であるが、悲劇が藝術的に自己目的のものである限り、道德的效果は從屬的又は間接的のものである。道德は教へる。然し藝術は鑑賞させる。これがすべてである。然し鑑賞された藝術の内容が、他の瞬間に於て、即ち對他的に利用され得る範圍に於て道德的效果を持ち得る。効果の程度に關しては互ひに得失を持ち、すべて場合に從ふべきである。然し約言するならば、道德は鞭打ち、藝術は納得させる。

三、道德の主體は意志であり、意志は求むるものに向つて強いことである。積極的にそれは奮闘であり、消極的にそれは忍従である。悲劇の道德的效果も亦この二つの方向に動く。悲劇はすべて戦ひ得べきものに對して勇氣を鼓舞する。そして又それは戦ひ得られざるもの、即ち克服を期待し得ざるものに向つて忍従のあきらめを指示する。

四、あきらめ云ふことは、今甚だ卑屈であるを解釋され勝ちである。然し克服し能はざることが認識の明白に於て證據立てられるならば、それに適應する道を選ばねばならぬ。あきらめはその一つであり、意志の強さを最もよく

實現した古代の賢人なるものも、この點に到着してゐる。たゞ識別しなければならぬことは、達成し得るものを達成し得ないことあきらめることである。これはあきらめではなく、認識の不備か、努力の缺乏かである。當然避くべきである。

これらの歸結に依り、悲劇的なものゝ大體の性質は明かであると思ふ。尙このことに關する多くの詳細は、他日別に稿を改むべきである。

